## 翼を持つ隣人の家、東川に棲う

2月19日、せんとぴゅあⅠにて第5回バードハウスデザインコンテストの表彰式を行いました。昨今の状況により前回から2年ぶりとなった本コンテスト。空白の2年間には開催を待ち望む声も多数寄せられていました。そんな今回応募があったのは、子どもの部・大人の部で計54点（対前回比はなんと80％増）。温めていたアイディアを詰め込んだ力作ぞろいの中から、審査員の新津秀幸氏（NPO法人フェザーフレンド代表）、あべ弘士氏（絵本作家）、織田憲嗣氏（町家具デザインアドバイザー）が各部で特賞1点、優秀賞3点、入賞5点を選出しました。審査項目はアート的に美しいかだけでなく、営巣できる構造か、入口が大きすぎて外敵に侵入されないか、中を掃除しやすいか―など多岐にわたります。作者の同意を得た作品は雪解け後にせんとぴゅあ内に設置しますが、さて、みなさんの作品は鳥たちにも気に入ってもらえるでしょうか？コンテストは来シーズンも実施予定なので、今からアイディアを温めて、ぜひご応募ください！

▲大人の部特賞は増田和人さん。ヘルメットせたキノコのおうちの上には巨大軟体動物が!?

▲表彰式に来てくれた子どもの部入賞者のみなさん。右から特賞の小森颯也さん、入賞の山上結愛さん、優秀賞の高木七海さん、入賞の瀬口真叶さん・小林清慧さん。

## 山も屋根も 雪崩に注意

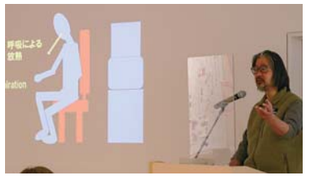
2月19日・20日、旭岳ビジターセンターにて講師4名による「雪崩から身を守るために」を開催しました。「雪崩」と聞くと山でしか遭わないように思いますが、命の危険という意味では屋根からの落雪も同じ。講師の声を心に留め、日頃からご注意を！

**▼大西人史氏（雪崩事故防止研究会）**

雪崩の基本的な知識や冬山に入る際の注意点を解説いただきました。地形から常に自分の立ち位置を確認し、しっかりリスクマネジメントしましょう。

**▼阿部幹雄氏（同会）**

レスキュー隊の日頃の訓練とそのための判断で、雪崩から全員救出された事例を紹介。「たすかるマップ」で危険個所や装備を確認することも大切です。



**▼及川欧氏（同会、旭川医科大学）**

熱と体力は座っているだけでも奪われていきます＝**写真**＝。自分の体力の限界を知り、今はどのくらいエネルギーレベルなのかを把握することで、遭難時に自力下山するかビバークして救助を待つかを正しく判断できます。

**▼有川直哉氏（旭川東警察署）**

山岳遭難救助隊員としての活動を紹介。身近な除雪や雪下ろしも死亡事故につながるので、常に足場を確認し、一人で作業を行わないよう心掛けを。

## ひとつの絵本ができるまで

2月19日、バードハウスコンテストと連動し、絵本作家・あべ弘士氏による講演会「鳥と絵本」を開催しました。旭山動物園を退職後、野生動物と出会いに世界中を巡っているあべさん。例えば北海道では、美唄市・宮島沼にやってくる8万羽の雁（ガン）が夜明け前に一斉に飛び立ち地響きになるさまや、一気に高度を下げてきたと落ちてくるまさに「落雁（らくがん）」な様子、天売島の海鳥・ウトウがイワシの群れを海面まで追う姿＝**写真**＝など、鳥の生態や鳴き真似を交えて臨場感たっぷりにお話しいただきました。北極に行った際は、「シロクマ親子の一連の様子をスケッチしていると会話が聞こえてくる（気がする）」とあべさん。その日のうちにラフを描きあげ、『ふたごのしろくま』（講談社）が出版になったのはなんと2ヵ月後という速さ。反対に宮沢賢治の詩『旭川。』をモチーフとした絵本『「旭川。」より』（BL出版）は、ラストに「無常菩提」のイメージとしてオオジシギ（ぴーさぴーさ…）を登場させるアイディアなど、構想から10年かけてようやく形になったそうです。1冊が誕生する過程を知ると、「この絵本はどうやってできたのかな？」と読むときの想像も膨らみますね。

## 自然と調和し、丁寧に生きる

2月23日、せんとぴゅあⅠで第71回デザインスクールを開催しました。今回はグランドテーマの『丁寧に暮らす、丁寧に生きる』に立ち返り、アテネファーム（下川町）の中田豪之助さん・麻子さんにトマトとの向き合い方をお話しいただきました。16年前に農家を始めた頃、師匠の「大事なのはよく観察すること」という言葉の意味がわからなかったと言う麻子さん。どうすればトマトが健康になれるのか一日中観察するうち、「トマトが今、大きくなりたいのか、花を咲かせるのか、実を大きくしたいのか、根を伸ばそうとしているのかが分かるようになり、今は待つ時か、ほんの少し手を貸してやるべきかが見えるようになった」そう。「トマトをいじめるのではなく、少ない水でも幸せに育つようにする。本当にのどが渇く前には水をもらうと信頼されれば、地下水を探しに根を伸ばそうとせず、おいしい実をつけてくれる」と豪之介さん。人がトマトを育てるのではなく、人間も自然の一部。天候や虫、病気とも調和して、どれだけまっすぐ向かい合ってきたかが結果に結びつく―。中田さんにとってのトマトを、自分にとって大切なものに置き換えると、より良い暮らしに繋がりそうです。

## プリミティブな無意識の美

3月14日、せんとぴゅあⅡにてデザインスクール特別編⑫を開催しました。今回のテーマはプリミティブ（原生的）な椅子。そもそも椅子は、人類の歴史とほぼ同時―つまり2足歩行になって頭を支える負荷が増し、腰かける必要が出たことで誕生しました。そして、座るのに丁度よい石や倒木は数が限られるため、部族内の偉い者が優先的に使うようになります。こうして椅子は「人体を受け止める支持具」としての物理的な意味と、「地位を表す」精神的な意味を持つようになりました。写真のアフリカなどで使われている椅子のうち手前の4脚は、パーツの組み合わせではなく1本の木からコツコツ削り出され、権威の象徴として装飾も彫り込まれています。大量生産のモダンチェアにはない存在感とインパクトがあるこれらの「無意識の美」をもつ椅子は、アールデコ（幾何学的な装飾芸術）の時代にヨーロッパのデザイナーにしきりにリ・デザインされました。現在世界中で普及する椅子は、そうしてさまざまな要素を取り込んで発展してきましたが、さかのぼれば「4つのルーツ」に集約されます。

4月14日㈭の第13回ではその中から「シェーカーチェア」を紹介するので、「ルーツ」を探りにぜひお越しください。

▲3本足なのは不整地でもガタつかない工夫。逆に接地面が平面や多脚のものは、族長の居場所は整地していた証拠かも?

## 新時代を拓くエポックメイキングな椅子

2月14日、せんとぴゅあⅠでデザインスクール特別編⑪を開催しました。この回のテーマである『レッド&ブルーチェア』は、20世紀のオランダで「過去の様式を全て否定し、それまでにない新しい様式を打ち立てよう」と起こった芸術運動、デ・ステイルの時代に誕生しました。角材と平面の板により全てが直線で構成され、クッション性も皆無なこの椅子は「デザイナーの家族ですら座らなかった、と言われるほど座り心地は極めて悪い」と織田憲嗣氏。では、なぜそんな作品が近代デザイン史にとって重要なのか。それは、この椅子が後年の家具デザインに大きな影響を与えたエポックメイキング＝時代の転換を象徴する画期的なものだからです。ユニークな名作が生まれるまでには、試行錯誤を繰り返して完成度を高める過程が必要です。その大きなきっかけとなった作品を文化として後世に伝えることも、名作椅子の役割なのです。東川の工房やKAGUコンペで生まれる家具たちも、もしかすると未来で「エポックメイキングな作品だ」と評されているかもしれませんね。

まちのニュース Higashikawa Town News